

# 教専寺新聞

「いのち」

令和六年二月号

No. 243



教専寺ホームページ

能登半島地震により被災された皆さまに

衷心よりお見舞い申し上げます

このたびの地震によりお亡くなりになられた皆様、ご遺族の皆様へ心より哀悼の意を表します。

能登は古くからお念仏の地です。多くのご門徒さまが浄土真宗のみ教えとともに歩んでこられました。

「能登は やさしや 土までも」という言葉があるそうです。「うちは大したことはない」と現地の方々は仰られますが、被災地はすべて甚大な被災状況下にあります。厳しい寒さの中で不安がつる方々が、一刻も早く穏やかな日々をお過ごしになられますようお願いいたします。

## 2月の予定

【門徒役員総会・婦人会総会】

2月17日(土)午前9時より

【仏教婦人会法座】

2月26日(月)午後1時30分より

会員物故者追悼法要

講師 北山祐章 師(福山・光源寺)

【仏婦例会】

2月23日(金)午後1時30分より

【清掃奉仕】

毎週金曜日午後2時より

【教安寺】今月は特別な行事はございません。

先日、ある女性が「姉のように慕っていた方が亡くなったと聞いたのですが」と訪ねてこられました。お二人は何十年も姉妹のように接していましたが、最近、ほんの少しの思い違いで疎遠となり、その間に亡くなったこと、知らないまま一年がたってしまったこと、泣きながらお話していただきました。最後に「私は何をすればよいですか？」と問われました。もう、話すことも会うこともできません。「手を合わせていただくことでしょうか」とお答えしました。まだできることがあり、少し安心されたような気がしました。

いま、そばにいるひとを大切に、と思った一日でした。

そうだ！

うれしいんだ、生きるよろこび

たとえ、胸の傷が痛んでも

「アンパンマンのマーチ」やなせたかし

私たちは現実を生きています。その現実の中で、私たちはそれぞれ「思い」というものを持っています。この「思い」と「現実」がきちんと、あるいはそこそこかみ合っていると幸せを感じますが、事実そのようなことはわずかです。

現実には簡単に、冷酷に私たちの思いを打ち砕きまします。愛する人との別れであったり、職場や学校で人間関係がうまくいかなかったり。病気がかかったり、老いることで、自分の身そのものにも思い破られます。そ

のたびに傷つき、心折れて、へたりこんでしまう。時には、何でこんな目にあわなきゃならないんだ、と人生を投げ出してしまいたくなります。

この歌が、「そうだ」と確かめるところから始まるのは、様々な思いを破る現実には打たれ、胸に傷を抱いたところで、忘れていってしまうものがあるということではないでしょうか。そのことが、実は生きているそのもののよろこびなのです。

心臓は頼みもしないのに、動いてくれます。胃腸はお願いしなくても、食べ物を持ちこんで消化してくれます。思いを超えた身を私たちは生きています。それが「生きるよろこび」なのでしょう。

真宗大谷派能登教区「今日のことば」より